

マックス・ウェーバーの仏教理解について

芹川 博通

一 ウェーバー宗教研究の特色

1 文化・社会比較における問題意識

マックス・ウェーバーの宗教社会学の論点の一つに、東西の文化(宗教)・社会比較があるが、ここにおけるウェーバーの立場ないし問題意識は、「いっさい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な、*universal* 意義と妥当性をもつような発展傾向をとる——と少くともわれわれは考えたい——文化的諸現象が姿を現わすことになったのかと。今日、われわれが『妥当的』《*gütig*》だと認めるような発展段階にまで到達している『科学』《*Wissens-chaft*》なるものは、西洋だけにしか存在しない。」⁽²⁾ というものである。ついで、『世界宗教の経済倫理』に関する諸論文では、

もっとも重要な文化諸宗教とその環境をなす経済および社会層分化との関係をみわたしながら、つきに分析されるべき西洋における発展との比較、*Vergleich* のための問題点を見付け出す、そうしたことに必要なかぎりにおいてはあるが、因果関係の二つの側面の双方、*beide* を追究しようと試みている。というのは、そのようにしてはじめて、他の経済倫理とは異なって西洋の宗教的経済倫理にのみ固有な諸要素についての、多少とも一義的な因果帰属、*Zurechnung* をおこなうことができるからである。(中略)むしろそれぞれの文化領域について、過去にせよ現代にせよ、西洋の文化発展とは対照、*Gegensatz* であるようなものが故意に強調されている。⁽³⁾ という。

したがって、ウェーバーの文化(宗教)・社会比較における問題意識は、西洋における発展との比較のための問題点を見出すこ

とであり、それぞれの文化領域について、西洋の文化発展とは対照をなすものが強調されていることを述べているのである。

2 理念型による概念装置と座標軸

さらに、文化(宗教)・社会比較の方法として、随所に理念型 Idealtypus (あるいは理念型的な手段)が採用され、それが複雑な概念装置と座標軸を設定している。ここで取り扱う理念型は、「現世的禁欲」の理念型の解明と、アジア宗教の理解に必要な理念型のいくつかに限定して、みることにする。

ウェーバーによると、宗教的行為の側面より、神と人との関係に注目して、

一、人間が神の「道具」《Werkzeug》(あるいは「武器」)《Rustzeug》として行為することから「禁欲」Askese である。

二、人間が神の「容器」《Gefäß》として行為することから「瞑想」Kontemplation あるいは「神秘論」Mystik である。

この二つの理念型で、「現世的内的」innerweltlich と「現世逃避的」weltlich 的概念を組み合わせ、次の四つの理念型を設定しよう。

- (1) 「現世的内的禁欲」innerweltliche Askese
 - (2) 「現世逃避的禁欲」weltlichige Askese
 - (3) 「現世的内的神秘論」innerweltliche Mystik
 - (4) 「現世逃避的瞑想」weltlichige Kontemplation
- この四つ理念型のなかで、とりわけ「現世的内的禁欲」を浮彫り

にするために、救済財の施与者と救済方法に関する諸理念型が示される。そこには、仏教信仰にみられる典型的な理念型もみることが出来る。

第一に、救済財の施与者の理念型として、次のものを示している。そして、それぞれの理念型で、下位の理念型を提示している。

1. 「救済者信仰」Heilandsglauben あるいは「救済者宗教意識」Heilandsreligiosität——生れる、もしくは死せる救済者に対する信仰で、(1)「救難聖人」Nothelfer (2)「仲裁者」Fürsprecher (3)「平民的秘教者」plebejische Mystagog (4)「聖徒崇拜」Hagiolarie (5)「祈禱文礼拝」Gebetformelndacht (6)「偶像崇拜」Idolatrie などがみられる。仏教の大部分、アジア宗教の特徴をここに見出しうる。

2. 「秘蹟恩寵」《Sakramentsgnade》——祭司あるいは秘教祭司によって秘蹟恩寵を施与するばあいをさす。このときの仲介者の信任のそれ方によって、(7)「カリスマ的恩寵」charismatisch Gnade (8)「アン・シニタルト的恩寵」Anstaltsgnade (あるいは「聖社典的恩寵」Sakramentsgnade) がある。

3. 「信仰」《Glauben》あるいは「信仰宗教意識」Glaubensreligiosität——信仰一般をさすが、教義のうちで本質的な信仰簡条が要求される。(9)「明示的信仰」《fides explicita》と「信仰の權威で自己の確信のすべてを服従させる (10)「暗黙的信仰」《fides implicita》があり、とりわけ後者の信仰をさす。

4. 「預定恩寵」Predestinationen — 全智全能の力をもち、人間の行為によって左右されない現世超越神の恩寵をい、カルヴァン(「預定の信仰」)やホメットの教えはその典型である。ここには (1)「現世超越神」überweltlicher Gottと自己否定にその特徴をみる事ができる。

第二に、救済方法に関する理念型として、以下の三つが提示されている。

5. 「儀礼主義」Ritualismus — 救済宗教においては、体系化がなされ、儀礼を通して、信念という心情が形成される。

この宗教的行為(信念宗教信仰)と日常的行為の関連に、次の五つのばあいをみる事ができる。(1)儀礼的規則による徹底した生活規則化がなされ、日常的行為が「分断」される。(2)俗人の儀礼の参与、敬虔的瞬間の「気分内容」の獲得が目標となる。儀式と日常的行為の「分断」。(3)神秘主義的傾向が生まれ、敬虔と日常的行為が「分断」。(4)秘蹟と日常的行為が結合(カトリックの懺悔)。秘蹟の呪術的性格と懺悔が無価値になると、ピュリタニズムが典型をなす。(5)俗人の積極的儀礼参加。その儀式が日常的行為にわたり、戒律をもつと、日常的行為と結びつく(ユダヤ教、ヒンドゥー教)。

6. 「社会的実践行為」soziale Leistungen — 救済追求のための実践行為として、三つのばあいがある。(1)社会的実践行為が、個別に善悪と評価され、宗教的運命が規定される。日

常的行為は倫理的に組織化されずにとどまる(インドの業の説、カトリシズム)。(2)個々の社会的実践行為が、倫理的な全人格性の徴候、表現とみなされる。(3)宗教的社会的な善き業が、自己完成のための手段として考慮されるばあい。(4)自己神格化の手段としての恍惚。急性は狂躁による急性の陶酔、憑依。(5)神の要求する宗教的諸特性を獲得することが目標となる。

7. 「自己完成」Selbstervollkommnung

二 ウェーバーの仏教理解

1 インドの仏教

ウェーバーが論じている仏教を、インドの仏教とインド以外の仏教に二分し、インドの仏教の理解からみることにしよう。

まず、インドの仏教では、古代仏教 *alter Buddhismus* (これには原始仏教と小乗仏教が含まれている)と大乘仏教 *Mahayanismus* が取り扱われている。

ウェーバーは、古代仏教を概観し、つづいて、五蘊、仏教の罪悪観、四諦、輪廻説、十二縁起、サンガと戒律などを論じ、古代仏教をプロテスタンティズムの倫理と対比して、次の点を指摘している。

(一) この教団宗教は合理的経済倫理を發展させることができなかった。古代仏教が「大乘」において、純粹に修道僧の「秘

密集会」仏教 (Konventikel) Buddhismus、つまり「小乘」とは反対に、俗人宗教を發展させる過程をたどったが、経済倫理はかかる宗教から發展しなかつた。

(二) プロテスタントイイズムにみられるような職業倫理の發展がみられない。武器、毒薬、アルコールなどの商売、奴隸商売、屠殺業などは優婆塞には禁じられた職業であり、修道僧が農耕労働を非難した。「南方」の文書によると、ブッダの倫理は、静寂主義と労働活動説の「二元主義」(Dualistisch)である。

(三) 古代仏教には、富の獲得、奢侈品消費にたいする、なんらかの個人道徳的、社会倫理的抗議は、世俗倫理としては存在しなかつた。

(四) 修道僧の倫理には、労働を知らなかつただけでなく、他の通常の禁欲的方法も知らなかつた。ただ、補助手段のみを知っているだけで、それは、瞑想の深化、教化、懺悔と師による弟子への、つまり古い修道僧による新しい修道僧への訓戒にもとづく目覚めた自己抑制の確保に向けられた。仏教はいかなる形態の合理的禁欲も拒否している。

(五) 仏教的救済は、禁欲を合理的の生活方法論として把握すると、原理的に反禁欲的である。

(六) 仏教の救済理論には、行為におけるいかなる現世的動機づけをまったく根絶するところの、一つの概念が形成されて

いる。それは、いかなる合理的行為も、明白に拒否される。それゆえに、集中的な静観と純粋な瞑想という、純粋に精神的な体系化を除いて、ヨーロッパの僧侶階級にますます發展した全領域にわたる生活態度の合理的方法論が、仏教に欠けている。

(七) 仏教教団は、拘束と規制を意図的に、首尾一貫して、最小限にしたために、無構造である。

(八) ブッダの布教の実践的動機は、神祕論的宗教心をもつ偉大な達人に特有な、かの慈悲心に満ちた愛の無宇宙主義 (ethersvollster Liebeskosmosismus) は、ほとんどいたるところにみられるように、神祕論的救済所有の心理学形式、すなわち神に真摯な寂靜状態という特有なオイフォーリー (Euphorie) をともなっている。それが、かれらの多くを神祕論的救済探究の合理的な帰結に反し、靈魂救済の道へ駆りたてた。

大乘仏教は、救拯論や三身論を展開させ、密教化、呪術化を進行させていったことを述べて、大乘仏教の特色を次のように示している。

(一) 大乘仏教こそは、また、最初は形式的な祈禱禮拜を通して、そして最終的には転輪藏の技術 (Technik der Gebetsmühlen) および空中に舞うか、あるいは偶像に吐きつけられるかした護符の技術を通して、儀礼の最高至上の機械化に到達し、かつまた、そのことによって全世界を、ひとつの怖ろしい呪術

的な魔の園 magischer Zaubergarten に変貌させた。⁽¹⁵⁾

(一) 仏教が、そしてアジアにおいて仏教のみが、どうであるうと、つねに全被造物にたいする真摯な Innigkeit 態度と人道主義的な慈悲心の特色を、一般の人々の情操のなかにうえつけた。⁽¹⁶⁾

(二) 大乘には、俗人の合理的な生活方法論を創出するためのいかなる萌芽もまったく欠けていた。大乘仏教は、かかる合理的な俗人宗教意識 Laienreligiosität を創出するどころか、それとは別に、宗教的、かつ本質的にはプラフマン的な知識人の神秘論を、俗人の、生まな呪術、偶像崇拜、聖徒崇拜、もしくは祈禱文礼拝などに結びつけた。⁽¹⁷⁾

(三) 小乗学派 Hinayana-Schule が僧院における組織的な一種の俗人教育を發展させたが、この現象は、組織的に維持された制度としての大乗仏教に伝えられている。⁽¹⁸⁾

2 インド以外の仏教

ここで取り扱われている地域は、小乗仏教の中心であるセイロンとインドシナ、および大乘仏教が展開した中国、朝鮮、日本、内陸アジアであるが、紙面の都合上、日本を中心にみていくことにしたい。

ウェーバーの提示した日本における大乘仏教の特色は、次のようである。

(一) 仏教は、皇室の庇護のもとに、文識層の貴族的な救拯論と

して、導入された。このとき大乘仏教は、日本においても、それ自身に存在している種々の可能性を、学派と宗派の形成によって、早急に發展させた。⁽¹⁹⁾

(二) 大乘仏教がもたらしたものは、合理的で宗教的な生活規制、現世外的な救済目標と救済方法 *äußerweltliche Heilsziele und Heilswege* および情操内容の昂揚であったが、それらは、本質上、アニミズム的で呪術的な崇拜、すなわち、いかなる直接的な倫理の要求を欠く一切の崇拜とは、正反対のものであった。⁽²⁰⁾

(三) 日本では、封建的名誉観念を超えて欲動・感情生活 *Trieb und Empfindungsleben* が浄化され、發展したが、それらはずべて、大乘仏教の仕事であった。⁽²¹⁾

(四) 大乘仏教は、日本においても、インドの主知主義的救拯論を冷静に和わらげた。この救拯論は、「品行」と「礼儀」にかんし、日本において封建的なものへふたたび逆行した儒教的戒めと明らかに融合し、品位ある举措および身分をわきまえる礼節と調和した、あの紳士の理想を生み出した。⁽²²⁾

(五) 日本仏教は、中国の多くの宗派の流れを汲んでいるにもかかわらず、日本仏教独自の發展を示した。⁽²³⁾

なお、日本の仏教宗派のうちで、ウェーバーが取り扱っているものは、真言宗、浄土宗、禅宗、真宗、日蓮宗であるが、とりわけ真宗について多く論じて、真宗が、インドのバクティ宗教意識

ヤルクト派と類似している点を指摘している。⁽²⁴⁾

3 アジア宗教の一般的性格

以上のように、ウェーバーの仏教理解の特色は、仏教をアジア宗教意識の一般的性格のなかに位置づけている点である。アジア宗教意識の一般的性格を論じた次の文は、ウェーバーの仏教理解に一致しているからである（中国と日本のばあいは除かれている）。

あらゆるアジアの一切の先知主義的救拯論に共通している鋭い形のグノーシスや神祕論の性格ならびに神にたいする真摯な感情、神を見たり、神に憑かれたりすることなどの内面的な親近性および神祕論者や呪術師、Magier との内面的な親近性が決定的に作用した。呪術師が中国や日本とは異なって強力に弾圧されなかったアジアの他の地域では、すべて救済者宗教意識 Heilandsreligiosität は聖徒崇拜 Heiligdarstellung の形式をとり、しかもそれは、生ける救済者 lebender Heiland すなわちグル Guru と同類の恩寵を授ける者（それがより秘教的なものであれ、より呪術的なものであれ）にたいする聖徒崇拜の形式をとっていた。⁽²⁵⁾

三 二つの評価——むすびにかえて

文化や社会の研究には、顕著な二つのアプローチの仕方がみられる。丸山真男氏によると、一つは、「研究対象についてできるだけ広汎に資料を渉猟した上で、分析の道具としてのカテゴリー

とその相互関係を精密化することにはあまり関心をもちず、いわば「対象主義的」に制度や文化を解明して行こうとする」立場で、他の一つは、「方法主義的」というべきもので、「ここでは歴史的主体は一旦その『即自的』な統一性を解体され、方法的スキームに従って各要素間の意味連関が分析されたのちにあらためて歴史的過程と結合される。ダイナミズムはかくて第一義的には時間的発展よりも『構造』⁽²⁶⁾の体系的な相互作用性の問題として視野にのぼって来るのである。」そして、それぞれの評価については、「対象主義的」な「ジャンルに（相対的に）属する研究にたいする評価はいわば個々のプラス点と個々のマイナス点との加除算として示されうるのにたいして、こうした高度の方法意識に貫かれた研究（「方法主義的」）はその『メトード』をいわば全体に掛け合せた結果が評価されることになる。」と述べている。⁽²⁸⁾

そこで、以上述べてきたようなマックス・ウェーバーの仏教理解について、これを「対象主義的」に評価するばあは、今日までかなりの批判がなされてきている。そこには、資料の問題、言語理解の問題、当時のインド学ないし仏教学が初歩的であったことに起因する問題など、批判の材料は他にもあると思われるけれども、それらの諸批判点を補うかたちで、あるいはウェーバーの仏教理解を批判する目的で、たとえば、友松円諦「仏教経済思想研究」（東方書院、一九三三年）、内藤莞爾「宗教と経済倫理——浄土真宗と近江商人——」（『年報社会学』八輯、一九四一年）、大野信

三「仏教社会・経済学説の研究」(有斐閣、一九五六年)、中村元「宗教と社会倫理」(岩波書店、一九五九年)、久保田正文『仏教社会学』(日新出版、一九六二年)、山折哲雄「マハヤナ・ユイスマンズ・ワイルド——感性的神秘主義試論」(『三蔵』30・31、大東出版社、一九七一年)などをみる(29)。

このようなウェーバーの仏教理解からもわかるように、ウェーバーの宗教社会学、つまりかれの宗教研究は、すぐれて「方法主義的」にその真価が問われなければならないものであることがわかる。

- (1) マックス・ウェーバーの宗教に関する研究書は、大別して、二つに分けることができる。その一つは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(一九〇四—〇五年)が巻頭論文として取められてゐる『宗教社会学論文集』全三巻 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, II, III. (一九二〇—二二年) (以後 *G. A. zur RS.* と略す) と、『プロテスタンティズムの諸系派と資本主義の精神』(以下二つを「世界宗教の経済倫理」とし、『儒教と道教』(以上が第一巻)、『ヒンマウー教と仏教』(第二巻)、『古代エタヤ教』(第三巻)が取り扱われている。この『論文集』は歴史・分析的研究で、ウェーバーの歴史観を表明したものと云つて可い。他の一つは、『経済の社会』 *Wirtschaft und Gesellschaft* (一九二二年) (以後 *W. und G.* と略す) の第二部第五章「宗教的共同体関係の諸類型(宗教社会学)」であつて、こゝには、宗教の体系的・類型的研究がなされてゐる。
- (2) Max Weber, *G. A. zur RS.*, I, S. 1. (大塚久雄・生松敏三訳『マックス・ウェーバー 宗教社会学論選』みすず書房、一九七二年、五頁)。

- (3) *Ibid.*, S. 12. (訳、二四頁)。
 (4) たとえば、池田昭「ウェーバー 宗教社会学の世界」勁草書房、一九七五年、一六八頁参照。
 (5) ウェーバーの理念型によると、原始仏教をはじめとして、仏教の多くは「現世逃避的瞑想」であることがわかる。
 (6) こゝは、池田昭「日本の精神構造論序説」勁草書房、一九六七年、および同他訳「アジア宗教の基本的性格」(訳者あとがき)勁草書房、二二七頁などに多くよつてゐる。
 (7) Max Weber, *G. A. zur RS.*, II, S. 234. (池田昭訳「アジア宗教の救済理論」勁草書房、一九七四年、一六三頁)。
 (8) *Ibid.*, SS. 235—236. (訳、一六五—一六六頁)。
 (9) *Ibid.*, S. 236. (訳、一六六頁)。
 (10) *Ibid.*, S. 237. (訳、一六七頁)。
 (11) *Ibid.*, S. 237. (訳、一六八頁)。
 (12) *Ibid.*, S. 240. (訳、一七二頁)。
 (13) *Ibid.*, S. 242. (訳、一七四頁)。
 (14) *Ibid.*, S. 248. (訳、一八四頁)。
 (15) Max Weber, *G. A. zur RS.*, II, S. 278. (池田昭・山折哲雄・日隈威徳訳「アジア宗教の基本的性格」五〇頁)。
 (16) *Ibid.*, S. 278. (訳、五〇—五一頁)。
 (17) *Ibid.*, S. 278. (訳、五一頁)。
 (18) *Ibid.*, SS. 278—279. (訳、五一—五二頁)。
 (19) *Ibid.*, S. 301. (訳、八九頁)。
 (20) *Ibid.*, SS. 301—302. (訳、八九頁)。
 (21) (22) *Ibid.*, S. 302. (訳、八九頁)。
 (23) *Ibid.*, S. 302. (訳、九〇頁)。
 (24) *Ibid.*, SS. 302—304. (訳、九〇—九四頁)。
 (25) *Ibid.*, S. 304. (訳、二〇七頁)。

(26)

R・N・ペラー(堀一郎・池田昭訳)『日本近代化と宗教倫理——日本近世宗教論——』未來社、一九六二年、の「解説」に、丸山真男「ペラー『徳川時代の宗教』について」(三一九―三五四頁)がある。丸山論文、三三一頁。

(27)

丸山、前掲論文、三三二頁。

(28)

丸山、前掲論文、三三四頁。

(29)

ここに掲げた諸論文の概要、および本稿の詳細な内容については、拙著『救済と再生 マックス・ウェーバー宗教社会学入門』みくに書房、一九八三年一月、の「第六章 マックス・ウェーバーの仏教理解」を参照していただきたい。

(せりかわ・ひろみち、宗教学・宗教社会学、

淑徳短期大学教授)